



# Takeo

— 日本酒との初めての出会い —

## ■誕生日

学校のある、普通の日。いつも通りに起床。  
父と姉は既に外出していたが、  
出掛けに、祖母と母から  
「おめでとう。」の言葉をもらう。

大学に着いて、仲の良い何人かと合流。  
談笑しながら講義室へ行くと  
サプライズで皆からの祝福。  
嬉し恥ずかしながら、皆の笑顔に感謝。

## ■父からの贈り物

友人とご飯を食べたり、カラオケに行ったり  
十分に誕生日を満喫。  
楽しさの余韻に浸りながら、いつもより遅めの帰宅。

家に帰りつくと、父が贈り物と共に待っていてくれた。  
「20歳、おめでとう。」  
初めてのお酒は、父と共に日本酒を。  
少し、気恥ずかしいなかでの父との会話。  
初めて、ひとりの大人として父親と向き合った日。

## ■成人式

日本酒が想像よりも美味しく飲みやすいと知った誕生日。  
成人式当日は、特別な気持ち。嬉しさと少しばかりの緊張と。  
ちょっぴり大人になったかつての仲間と再会。  
式の後には、かつての仲間達と同窓会。  
良い機会なので日本酒に再挑戦。興味を持つ仲間たち。  
皆でともに。  
懐かしい思いで話に花を咲かせて。

ハレの日、おめでとう。

## 日常 + a 特別な一日。

特別な日の傍らにあるお酒。主役は人物。演出に日本酒を。

### ▶ step1

贈り物としての出会い



### ▶ step2

美味しさを知る

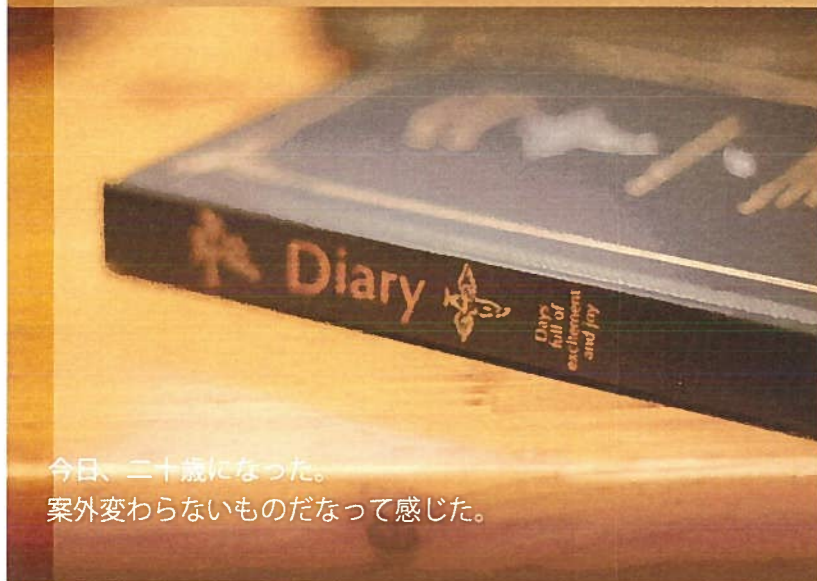


### ▶ step3

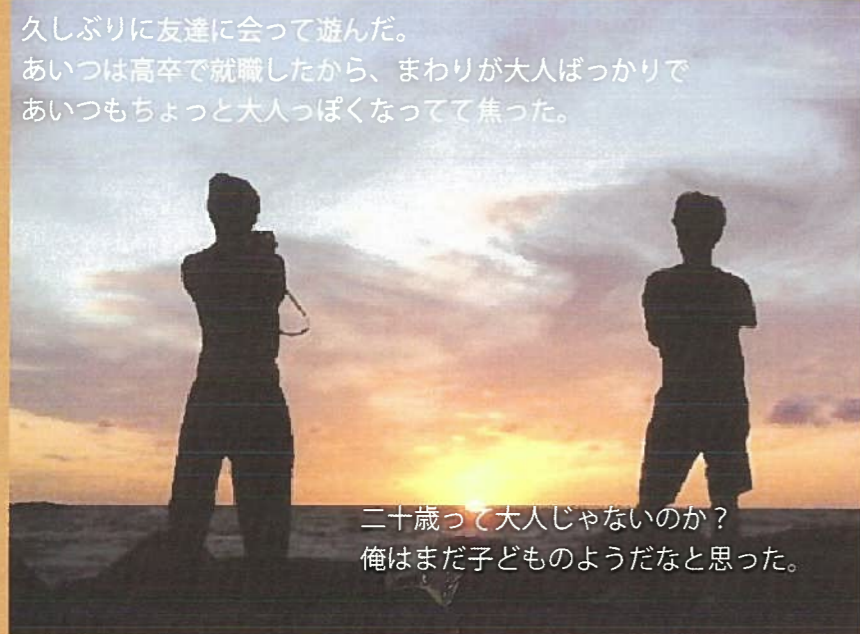
仲間と分かち合う



# Takeo's story



今日、二十歳になった。  
案外変わらないものだなって感じた。



久しぶりに友達に会って遊んだ。  
あいつは高卒で就職したから、まわりが大人ばかりで  
あいつもちょっと大人っぽくなって焦った。

二十歳って大人じゃないのか？  
俺はまだ子どものようだなと思った。



家に帰ると母さんがあわてて俺を呼んだ。  
電話がかかって出たら田舎のばあちゃんからだった。  
なんか、すげえ喜んでた。  
横からじいちゃんの声もして、  
「やっと一緒に酒が飲めるな！」って言われた。  
…なんかちょっと、嬉しかった。



しばらくして、大学の先輩から連絡が入った。  
「お前今日で二十歳だろ？祝いにおごってやるから、飲みに行こうぜ！」  
「先輩それ、飲みたいだけの口実じゃないっすかあ」  
…なんて言いながらちょっと嬉しかった。  
先輩の、大人の中に…ちょっとだけ入れた気がして…。

先輩はがつつ飲んでて、やがて酔って見えて  
カクテルばっか飲んでた俺に先輩は日本酒を差し出した。



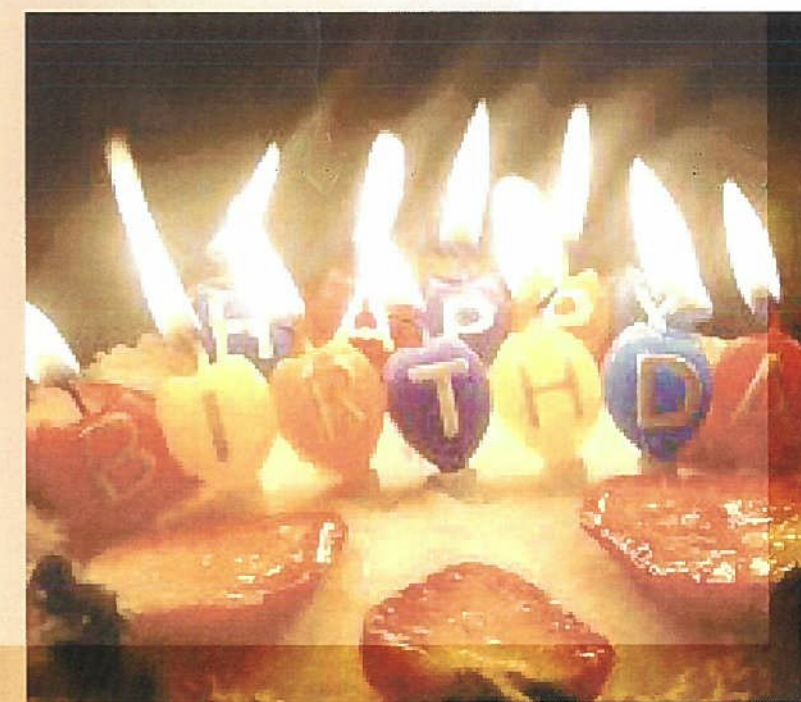
「見かけが気になんなら変えればいいだろ」  
確かに、ちょっとお洒落になったような気がして悪くなかった。



「先輩おやじじゃないっすか！」  
って日本酒は親世代が飲むもんだと思ってたけど  
「これは日本の心だ」  
とかなんとか言われながら、ちょっとだけ口に入れた。

甘いような、辛いような。  
でも全然嫌じゃない味が口の中に広がって…  
おやじだと馬鹿にした俺に先輩は  
日本酒をグラスにつぎだした。

先輩とこれでもかかってくらい話して、その日は別れた。  
最後に一言「誕生日おめでとう」って言いながら拳をぶつけられ。  
先輩なりの照れの入った祝い方だったんだな、と誕生日っていう特  
別な感じを 久しぶりに感じれたような気がする。



俺もいつか後輩におんなじこと、してやろう。

### シーン1：成人式前夜

Takeo は明日が成人式。  
人生の節目を迎える。  
もう20歳にはなっていて、  
お酒もタバコもできるけど、  
あまり興味はない。



### シーン2：成人式

成人式当日。  
特別な日だけど、  
いつもと変わらない気がする・・・  
Takeo に贈り物が届いていた。  
ヨシヒコおじさんからだ。

Takeo へ

もう20歳になったんだね。お酒が飲めるので、四  
国旅行のお土産に日本酒を贈ります。20歳の門出  
に、日本ならではの味を味わってください。

### シーン3：お酒との出会い

お酒に興味はなかったが、  
大好きなおじさんからもらったお酒だと思うと  
なんだかわくわくした。  
一口飲んでみた。  
苦くて好きな味ではなかったけど、  
ちょっぴり大人になった気がした。  
これが日本の味か・・・  
悪いもんじゃないな。

### シーン4：友達へのプレゼント

誰かに20歳を祝ってもらう喜び。  
贈り物のお酒のわくわく感・・・  
お酒はただ酔うためにあるものじゃないんだな。  
そう考えると、この喜びを誰かと分かち合いたい  
気がした。  
そうだ、友達のヒロシにも日本酒を贈ってやろう。  
あいつも酒には興味がないって言ってたけど、  
きっと喜ぶぞ。



# タケオくんとお酒

## 1・タケオくんの家族

タケオくんは二人兄弟の末っ子で、上に五歳離れた兄がいる。  
両親はどちらも酒好きで、兄も交えて毎晩晩酌をしている。

飲んでいるお酒はたいてい日本酒。

タケオくんは日頃から日本酒を目にする環境にいるが、  
成人しても飲もうとは思わない。

なぜなら、酒臭くなった両親や兄を目にするからである。

「あんな酒臭い大人にはなりたくねえ。」

それがタケオくんの口癖。

## 2・誕生日前日

タケオくん二十歳の誕生日まであと一日。  
両親から何かを貰うなんて期待もしていない。

誕生日前日の夜。

部屋でぼーとしているタケオくんのところに兄がやって来た。

「タケオも明日で二十歳か。お酒でも飲みに行こうな。」

しかし、タケオくんは二十歳になるという実感が全くない。

『二十歳になって何が変わるのだろう。』

## 3・二十歳になった

タケオくんの誕生日。

今日で二十歳だというのに、大したこともなく一日が終わろうとしていた。

その日の夕飯。

両親がおもむろに未開封のお酒を食卓に出してきた。

いつもとは違うが、日本酒であることは確かだ。

『また今日もいつもの晩酌が始まるのか。』

そう思いながらお酒を眺めていた。

すると父が「誕生日おめでとう。今日からタケオも大人だな。」と、そのお酒を渡してきた。

『そうか、今日からお酒を飲めるんだ。』と、そこで二十歳になったことを実感した。

## 4・その後のタケオくん

誕生日の晩にもらった日本酒。

あまり興味はなかったが、試しに飲んでみると思った以上に飲みやすかった。

そして、気づけば家族と一緒にお酒を飲んでいる。

いつもの晩酌の輪に、入ることが出来る。

そこでタケオくんは

『酒臭い大人でも、いいかなあ』と思うのであった。